

# 疎開文化人研究に向けて——関口存男の場合

柴田明子（学籍番号 20Q8104）

## 0. はじめに

第二次世界大戦の戦中戦後には多くの文化人が地方に疎開していた。作家では太宰治や丸山薫、学者では高津春繁や三木清、芸術家では棟方志功などである。こうした文化人の中には疎開先の人々とともに文化活動を行った者もいた。彼ら疎開文化人と呼びうる人々の活動とその影響についてはこれまでも様々な視点から研究されている。関口存男（せきぐちつぎお 1894〔明治27〕～1958〔昭和33〕年）もそうした疎開文化人の一人である。ドイツ語学者であり法政大学でも教鞭を執った関口であるが、1945〔昭和20〕年3月から1948〔昭和23〕年11月まで長野県妻籠へ疎開をしており、公民館活動や演劇指導を行っていた。

本稿では、先行研究に基づいて疎開文化人研究で提出されてきた視点を示し、その後、関口の疎開時代を取り上げる。その上で今後の研究の可能性を考えたい。

## 1. 疎開研究と疎開文化人研究

疎開の時期として本論では、第二次世界大戦末期、東京都からの学童集団疎開が始まった1944〔昭和19〕年8月から、1945〔昭和20〕年8月の終戦と「都会地転入抑制緊急措置法」（1946〔昭和21〕年3月9日～1947〔昭和22〕年3月31日）の解除を経た1950〔昭和25〕年頃までとする。関口にも及んだ1946〔昭和21〕年1月からの公職追放令による追放も1949〔昭和24〕年2月には特免措置が講じられ、1951〔昭和26〕年には第一次追放解除、1952〔昭和27〕年には追放令そのものが廃止されている。

そもそも疎開研究は、一つ一つの具体的事例を明らかにすることから始まる。それは疎開文化人であればそれぞれの伝記の中で一応は記録されており、疎開文化人自身が作品の中で題材にすることもある。

こうした疎開文化人の事例へのアプローチとしては以下の二つがある。一つは社会史など歴史研究での取り扱いである。この場合、疎開文化人はその一項目である。ただし具体的事例を扱うならば、その文化人の伝記や活動に触れざるをえない。もう一つは疎開した人物の生涯と業績研究の一環としてのアプローチである。作家であれば作品／作家研究の一アイテムとして疎開を扱う。関口の場合も両方のアプローチが可能である。

まず、歴史研究としての疎開研究だが、全般的な提示としては黒川みどり（2006）の都市・農村の関係から疎開を考察したものが挙げられる。黒川の関心は、疎開と配給を軸に「戦時を通じて都市と農村を中心とする地域秩序がいかに変容したのか」（黒川 2006：31）にあった。疎開遂行によって都市と農村の対立は更に明らかになったのだが、それでも「疎開は、都市と農村の境界を、少なくとも人の移動という点において一定程度揺るがしたのである」（黒川 2006：53）と地方

への疎開の影響が認められる。そして「疎開は都市と農村の溝を深める方ばかりに作用したのではなく、農村を文化の発信地たらしめるきっかけとなった例も見られる」（黒川 2006：54）としている。

そうしたきっかけの一つが疎開文化人であり、北河賢三（2000）もそこに着目する。北河の研究は、「戦後の出発」という観点から「敗戦後の社会と地域文化の様相を明らかにしようとする」（北河 2000：10）ものである。ここでは「文化運動は戦時中に途絶えたのではなく、翼賛運動の一翼として推進されたのであるが、戦後の文化運動を検討する際には戦時期の文化運動との関係に注意を払う必要がある」（北河 2000：24-25）として「戦中・戦後の連関」が取り上げられる。

北河によれば、戦後の文化運動として4種があげられる。

- 1：青年および女性の団体で、青年団および婦人会
- 2：地方文化人が主導する地域の文化団体
- 3：社会教育行政機関・社会教育団体
- 4：労働組合文化部や職場サークル

そして、1-3のいずれにも疎開文化人が関わっていたとするのである（以上、北河 2000:16-18）。

歴史研究のスタンスをとりつつ個別具体的な事例・人物に特化したモノグラフとして、例えば、戦後の社会教育実践の事例を扱った笹川孝一（1986）や戦後民主化過程の事例を考察した安岡健一（2009）がある。

笹川（1986）が取り上げている事例は「庶民大学三島教室」である。教室は1945〔昭和20〕年末から構想され、展開・分裂・再建を経て1948年〔昭和23〕6月に終焉を迎えた。笹川論文は、その歴史的意義を考察することで、戦後の社会教育実践の過程を明らかにしようとする。具体的には、木部達二（1915〔大正4〕年～1948〔昭和23〕年）の生涯と活動を、生誕時から人格・思想形成に影響した各モメント（家庭・生育環境、労働争議の体験、大学人としての研究歴、末弘巖太郎・丸山真男らとの交流）を同時代人の証言なども用いつつ追跡し、彼の実践である庶民大学を記述・分析している。木部の三島教室の成立基盤に彼以前の戦前戦中の社会教育実践の「遺産」があつて、疎開していた彼がそこに働きかけ、教室成立の契機となったという。それゆえ彼の実践は戦後の社会教育実践史というより広い文脈で捉えられるべきとしている。

安岡（2009）は、プロレタリア作家の貴司山治（本名 伊藤好市 1899〔明治32〕～1973〔昭和48〕年）の日記を主材料とし、戦後民主化過程の事例として京都府の開拓地における彼の活動を考察する。疎開は戦時末期・戦後初期における地域社会への人の「移動」であつて、社会的影響があつた。安岡はそうした事例の地道な発掘作業が重要と考えており、論文では具体的に、貴司の京都への疎開・入植（1945〔昭和20〕年4月頃）に至る契機、敗戦後の文化活動や開拓農民運動、京都府農地委員としての活動、GHQとの交渉などが記述される。安岡は更に、京都の民主

戦線運動との繋がりに言及しつつ、1948〔昭和23〕年1月の貴司の帰京後の開拓農民運動のその後を更なる研究課題としている。

こうした歴史研究のほかに、個別の文化人の疎開先での活動をその文化人論として論じるものがある。作家論として疎開を扱うもので、一例は井上雄次（1997）による詩人・丸山薫（1899〔明治32〕～1974年〔昭和49〕年）研究である。丸山は1945〔昭和20〕年4月、45歳の時に岩根沢に疎開し、当地で代用教員をつとめた。井上の意図は、岩根沢における丸山の「三年間の生活の事実を掘り起こし確定」（井上1997:4）であり、それが丸山研究に役立つとする。

歴史研究・文化人研究の両者を統合するような形をとりつつ、違った問題意識での研究もある。疎開先での文化人の活動を考察対象とするのではなく、疎開が戦後の文化にどのような影響を与えたか、戦後文化史の源流として疎開を見る立場である。例えば李承俊（2019）は「疎開体験がその後の戦後の意識にどう伝えられ、戦後意識の形成にどう関わってきたか」をテーマとし、学童疎開、疎開派、疎開の描かれ方をトピックとしている。

以上の他、疎開先の地域史編纂の一環で、規模・精粗さまざまに町村史という形で疎開文化人が記録されている。例えば、『南木曾町誌 通史編』や『企画展「埼玉へ疎開した文化人たち」』である。西村他（2007）といった地域振興あるいは町並み保存の観点からのものもある。

## 2. 関口存男の妻籠疎開

### 2.1. 関口の生涯概略と妻籠<sup>1</sup>

関口存男は陸軍士官学校を卒業し軍人として任官したが、その後、上智大学で学び、外務省にも関わった。上智大学哲学科に入学した頃に劇団「踏路社」の創立メンバーとなり、小劇場主義の新劇運動をおこす。後に関口を法政大学に呼ぶ野上豊一郎との出会いはこの時期である。関口は1922〔大正11〕年以降、没するまで目白文化人村に居を構えたが、岸田国土や会津八一らも住民であった。岸田は関口と法政の同僚でもある。

関口はドイツ語学の権威として知られ、数多くの教科書、研究書、翻訳書を公刊している。教育者としても活躍し、学習雑誌『初級独逸語』（後に『基礎ドイツ語』）を創刊・主宰した他、NHK ラジオ講座講師もつとめ、高田外国語学校、慶應外国語学校、慶應義塾大学、早稲田大学等で教鞭を執った。1922〔大正11〕～1944〔昭和19〕年には法政大学の専任教員であった。

1945〔昭和20〕年3月、関口は妻籠に疎開する。土地ゆかりの社会活動家勝野金政（1901〔明治34〕年～1984〔昭和59〕年）と社会学者であり日光書院の発行者でもある米林富男（1905〔明治38〕年～1968〔昭和43〕年）に誘われてのことだった。関口は日光書院に著者として関わっていたのである。関口家からは妻と次男を帯同し、長男夫妻は東京に残った。妻籠に疎開したのは、

---

<sup>1</sup> 以下、荒木（1959）による。

荒木茂雄（法政での関口の教え子でドイツ語学者）、桜井庄太郎（社会教育学者）、木下孝則・義謙兄弟（画家）、桐島龍太郎（吾妻書房社長、日光書院経営者、三菱財閥重役）、下山家（元国鉄総裁の実兄他）らであった。

関口と米林は1948〔昭和23〕年末暮れまで妻籠に残った。彼らは公民館運動（1946〔昭和21〕年7月5日文部次官通牒から）を盛り上げ、民主化運動を進めていった。1946年〔昭和21〕年10月には妻籠公民館を設立、翌年には全国初の文部大臣賞を受賞している（『南木曾町誌通史編』:932）。米林は村の実態調査を、関口は家を「公民館文化部」とし、初級英語講座などさまざまな学習講座、関口と米林を来訪する学者や演劇関係者による講座の開催、演劇グループによる上演などを行った。この時の演劇活動をした人々が中心となって公民館活動はその後も続けられ、昭和40年代の町並み保存運動に繋がった。

妻籠で関口は戯曲を執筆し、演劇指導・演出・上演を行っている。少なくとも『王様と予言者』『乞食の歌』『巣立ち』『争え、但し怒るべからず』の4本があり、最後のものは後に『教育と社会』（社会教育連合会、1948〔昭和23〕年9月1日：54-59頁）に掲載された。その「後記」によれば「この脚本は妻籠公民館において数回上演したもので、同公民館から長野、新潟、静岡、山梨4県の各公民館関係の要求に応じて台本のコピーを発送したという（『教育と社会』:59）。

関口はその後、公職追放（1946〔昭和21〕年3月）と解除を経て、1948〔昭和23〕年に帰京し、爾後、ドイツ語学者として活躍していくことになる。帰京直後の同年12月の勝野宛関口書簡は妻籠時代を「夢の様な三年八ヶ月でしたが、ほんとうに龍宮から出て来た浦島太郎の様な気がします。」（『勝野金政宛関口書簡』）と振り返っている。

関口が帰京した後も疎開先と関わり続けた形跡はない。

## 2.2. 関口妻籠時代を物語る資料

関口の疎開時代は、町史や回想記で散発的に言及されているものの単なるエピソード紹介に留まっており、彼にとっての位置や意義が考察されることはなかった。疎開文化人研究で関口を扱ったものもない。

刊行資料としては荒木（1959）がある。ここには、疎開先の人による証言として、勝野時雄「妻籠時代の先生」（291-294）と岡田昭司「妻籠時代の先生」（294-297）が収められている。なお、伝記に池内（2010）もあるが、疎開に関しては荒木（1959）の再話である。

私家版の回想記に長男の随筆集、関口存哉（2007）がある。

未刊行の資料としては3点：

- a. 『勝野金政宛関口書簡』（1948〔昭和23〕年12月（日付不明））
- b. 勝野金政の手記『今日の妻籠』（「昭和五十七〔1982〕年四月」という日付あり。）
- c. 米林富男の手記『夜明け前』（執筆年不明）

このうち、岡田は関口の妻籠時代を「一．疎開当初の城山での開墾生活。／二．演劇を通じた青年達との結びつき。／三．村人に規律ある生活を教えたこと。」（荒木 1959: 294-297）とまとめている。

勝野の手記に依れば、陸軍参謀本部宣伝謀略対米戦事務所（後の駿河台技術研究所）で勝野は米林と出会っている。勝野は対ソの、米林は対米の専門家としてであった。「何時の頃であったか、此の米林富男さんが私に向って疎開の話をもちかけた。」とあり、この二人により妻籠疎開は具体化した。その手記に挙げられている疎開メンバーは、上述の米林、桐島<sup>2</sup>、下山のほか、大同印刷社長の井関好彦とその専務の須藤紋一、大雅堂の田村一派、それぞれの社員や親類などで、関口は「日光書院のドル箱」とされている。

米林富男の手記では以下のような記述である。

昭和二十年三月十日の大空襲を経験しては、到底東京にとどまる気にはなれず、医者のおすすめもあって思い切って木曾山中に疎開ことにした。これには同調者が多く、結局私の経営する出版社に関係のある十三家族が共同して山の中に入り、荒地を開拓して新しい村をつくるという計画である。幸い駿河台で知り合ったロシア通の勝野金政氏は木曾の出身者で自分の土地を提供した上に、いろいろと受け入れ方を世話して呉れたので、四月中頃までに全家族の木曾谷疎開が実現した。

妻籠疎開は米林主導で計画され、そこに勝野や関口が関わったと考えられる。

### 3. 関口疎開研究の問題点と今後の課題

関口の疎開については研究が不十分である。もっとも木部（笹川(1986)）や貴司（安岡(2009)）、李(2019)の「疎開派」とは異なる。木部の場合がかねてより丸山真男らとの関わりがあった上での庶民大学であり、貴司はそもそも社会活動をする構えがあった。関口は世代的には戦前派であった。関口が、なぜどのようなきっかけで疎開するに至ったか、他の文化人との交流ゆえとしてそれがどういうものだったか、前史を明らかにすることが必要である。妻籠の活動も、偶然機会があっただけなのか、それとも関口に自発的なものがあったのか問題である。それは、関口における疎開の意味も含め彼自身を対象とした研究を行わないと見えてこないであろう。関口の活動を社会教育実践の流れで捉えるならば、関口達が去った後の妻籠での文化活動もテーマとなろう。現地での調査も必要である。

#### # 文献

---

<sup>2</sup> この手記では一貫して「霧島」となっているが、正しくは「桐島」。

## 刊行資料

『企画展「埼玉へ疎開した文化人たち」』 埼玉県平和資料館、2001年。

『南木曾町誌通史編』 南木曾町誌編さん委員会、1982年。

荒木茂雄他編『関口存男』 三修社、1959年。

池内紀『ことばの哲学 関口存男のこと』 青土社、2010年。

李承俊『疎開体験の戦後文化史：帰ラレマセン、勝ツマデハ』 青弓社、2019年。

井上雄次『丸山薫と岩根沢』 東京書籍、1997年。

北河賢三『戦後の出発：文化運動・青年団・戦争未亡人』 青木書店、2000年。

黒川みどり「地域・疎開・配給——<都市と農村>再考」 『講座アジア・太平洋戦争第六巻 日常生活の中の総力戦』（岩波書店、2006年）、31-60頁。

笹川孝一「戦後社会教育実践史研究(その2) ——第二次大戦後の社会教育実践史における庶民大学三島教室の意義」 『人文学報』（東京都立大学人文学部）21号（184）（1986年）、53-123頁。

西村幸夫他編『証言・町並み・保存』 学芸出版社、2007年。

安岡健一「敗戦後の疎開文化人による社会運動——京都府胡麻郷開拓地における貴司山治を事例として」 『新しい歴史学のために』（京都民科歴史部会）273号（2009年）、17-30頁。

## 私家版

関口存哉『関口存哉 随筆集』 関口信男、2007年。

## 未刊行の資料

『勝野金政宛関口書簡』 1948〔昭和23〕年12月（日付不明）。

勝野金政『今日の妻籠』 手記、「昭和五十七〔1982〕年四月」という日付あり。

米林富男『夜明け前』 手記（執筆年不明）。

関口存哉随筆集、関口書簡、勝野・米林手記はそれぞれ御遺族から資料提供を受けた。記して感謝申し上げます。